

## 「伊号第一五七号」潜水艦

兵庫県 池野 安一

私の生れた朝来は、但馬の国（山陰）播磨の国（山陽）を結ぶ播但国道が古くから利用されてきました。陰陽の分水嶺が「生野峠」で、この地は古くから銀鉱石（生野銀山）の産地で、少し北には明延銅山も在り、それ等の産出・運搬で街道筋は賑わっていました。

また海抜二百メートルの和田山城址（虎臥城）の累々たる「石垣遺跡」が頭上に迫り、その威圧感には実に堂々としていました。この城は山名宗全が築城し、後年赤松氏一族で代々受け継がれた「名城」で、国の指定史跡です。秋から春先までは遠くシベリアから日本海を経て風雪が強く、雨天多く、山陰地方の諺に

「弁当忘れても傘忘れるな」と言うがごとくです。なお生野峠を分水嶺として幾多の小川が集まり、

それが円山川となり日本海に流れ入る。私は幼少時から餓鬼大将で山に分け入り、野を走り回り、川に飛び込みながら育ちました。特に円山川の清流は格好の水練場でした。

家族は祖父母、両親、男子三人、女子五人、合わせて十二人の大家族で、私はその長男です。家は農業で生計を立てていました。田地一町歩、畑五反歩で、田地は二毛作と云って米と裏作で麦を耕作し、畑地は桑園で、養蚕を行っていました。年に三度も四度も繭の出荷がありました。晴雨を問わず三百六十五日の重労働でした。そうしたことが当時の普通の農家の姿でした。

私は小学校高等科を卒業して町役場に奉職しました。昭和十二（一九三七）年の春でした。その二年後に青年学校が義務化されました。町役場の勤務と家業を手伝いながら青年学校にも通いました。多忙な青年期でした。

昭和十五年十月二十日、大政翼賛会が発足しました。要綱に「八紘一宇の顕現を固定とす」に始

まり、「皇国は一億一心、全能力を挙げて天皇に帰一し奉り。物心一如の国家体制を確立し、以て光輝ある世界の道義的指導者たらんとす」の前文から六項目の国家一致協力を掲げました。それによって官憲の目が一層厳しくなり、地方警察にも「特高」が出来ました。

町役場は官民一体だと云って毎日のごとく警察へ「行のう袋<sup>⑧</sup>」が出され、私はその搬送係でした。また警察に防空監視所が出来、私はその監視員業務も行いました。この頃に青年学校が義務化されました。働く青少年が夜間等を利用して週に五、六時間通学し、軍事教育、訓練を受けました。巷では「戦争が始まるぞ」の声が流れていました。

私も座して待つより「いざ打ち出て征かむ」で、十九歳にして特別志願で徴兵検査を受けました。当時親族や血縁関係者に海軍軍人が多くいました。大槻作平海軍主計少佐を筆頭に特務大尉藤原弥太郎、池野敏夫海軍少尉、茂木市太郎一等兵曹、池野勝上等兵曹等々多士濟々でした。同じ軍人にな

るからには、泥に塗られ山野の進軍より、颯爽とした海軍士官の軍服や水兵さんのセーラー服に魅せられました。検査結果は甲種合格でした。

昭和十七年五月一日、「大竹海兵団・入団ヲ命ズ」との通達がありました。当時、日本男子の三大義務は、第一徴兵、第二教育、第三納税です。満二十歳になれば「壮丁検査」を受ける義務がありました。検査の種別は甲・乙・丙・丁と四種に区分されていました。

甲種合格は即軍人として入営・入団で、乙種も昭和二十年には第三乙種まであり、丙種でも合格でした。丁種は不合格でした（四肢不自由者と盲聾の男性でした）。それ以外には健康な身体でも「身長規定」があり、不足の場合は「短寸不合格」と云う嫌な呼び名がありました。海軍軍人は狭い艦内勤務のために身長の高い者を多く採用したと聞きましたが、それでも身長一八〇センチ以上の人も多くいました。

いよいよ晴れて入団、出征で、氏神様に武運長

久を祈願し、盛大な壮行会で見送られました。そして呉鎮守府・大竹海兵団へ入団し、即機関科に所属が決まりました。三カ月余り機関兵として特別教育がありました。一生懸命に勉強した甲斐があつて海兵団へ入団となりました。もちろん機関科兵員であつても海軍水兵です。カッター（短艇漕）や遠泳も行いました。水泳は故郷での河童遊びが役立って浜っ子に遅れをとることなく泳ぎ回りました。

この頃海軍戦力は、北はアリューシャン列島から南は遠くインド洋まで、文字通り東奔西走で、全海域での勇敢な海戦を聞き、血湧き肉跳るの感がありました。

なお「平和の礎」第三巻に体験談を掲載して頂きましたが、今一つ言葉不足の感がありましたので補充したいと思ひます。

昭和十七年八月十五日、夕食後に「鳳翔」に乗り組み、初めて一人前の水兵になりました。訓練は艦内でも陸上も変りなく厳しく、一挙手一投足に

敏捷さが要求されました。

昭和十八年二月五日、侍従武官御差遣に際し、恩賜の煙草を拝領致しました。「菊花の御紋章」を押し戴き、感激いたしました。揺れる紫煙にむせび涙を流した思ひは六十余年過ぎた今でもあの一服が眼の奥に映じています。

第五期普通科内火術練習生として海軍工機学校に入学、同教程を卒業。さらに第四十九期潜航術内火練習生として潜水学校に入学、そして同教程を卒業して第十九潜水隊へ赴任、「伊号第一五七号」潜水艦の乗員となりました。以後、太平洋方面の戦務を遂行、さらに潜水艦攻撃に日本海の舞鶴方面に出撃、索敵行動をしました。瀬戸内海、九州、四国、呉沖方面等々へも出撃しました。

艦内勤務には兵課と機関課の二課があり、兵課は、運用科、航海科、水雷科の三科、機関課は機械科Ⅱ内火、電機科Ⅱ電池の二科、他に主計と看護科（軍医・衛生兵）よりなっていました。給与と休養があり、軍隊にあつては最高の待遇でした。

命令、指揮は伝声管で伝えます。自分は機関課の通信科内火に所属し通信（電声管係）でした。

思えば大竹海兵団に入団し、海軍工機学校、潜水学校、軍艦「鳳翔」勤務、そして学校で勉強しました。とくに「伊号第一五七号」乗組員と各先輩のご教導を得て一人前の海軍軍人になりました。

残念なことは、米軍に日本軍の暗号電文が解読されていたことです。極秘電文が全部筒抜けでした。敵は優秀な音波、電波探知機で、日本軍の艦艇行動の暗号をすべて解読していたのです。世界に冠たる日本海軍の全行動、潜水艦のすべての行動が筒抜けに知られていたのです。もちろん陸軍も空軍も一切でした。そのために先手先手と進路を遮断したり攻撃を加えてきて、沈没、撃破されるというおびただしい損壊を受けたのです。空軍も地上の陸軍戦闘も、例外でなく後手後手となり、絶えず敵に先じられて、全戦域において敗れたのです。

海軍特殊潜航艇も回天以後は新型の「鮫龍」（三

人乗務艇）を開発し、航続距離は五〇〇マイルで、魚雷発射後は必ず帰港すべしというものでした。突進のみの片道燃料出撃は「戦艦大和」でした。四月六日、海軍最後の陸軍への支援作戦として水上特攻艦隊「菊水一号作戦」が発令され、戦艦「大和」の率いる巡洋艦八隻が沖繩へ発進しました。これは七日の沖繩第三十二軍の総攻撃に呼応するためのものでした。

これは逸早く米軍機動部隊の空爆により「大和」以下四隻沈没、四隻の駆逐艦のみ帰投しました。我が「伊号第一五七号」潜水艦は八月四日に帰投、整備を終えて二十六日に再び出撃の予定でした。

八月十五日、ポツダム宣言受諾、天皇陛下の終戦の詔勅下されました。

神風特攻隊神雷隊や同菊水隊の戦士たちは「戦鬪続行だ、勝利、しからずんば死だ」と叫び「七生報国」の鉢巻を締めて、敵に一矢を報いずして降伏は出来ぬと志気を高揚していましたが、自分達も複雑な心境でした。

そして広島や長崎への「原子爆弾」投下や全国主要都市、生産工場の壊滅的打撃等々のニュースが入り、我々の心情は複雑でした。

時 昭和二十年八月二十五日

本二十五日、陸海軍大臣ヲ召サセラレ

左ノ勅語ヲ賜ハリタリ謹ミ傳達ス

『朕帝國陸海軍ヲ復員スルニ方リ朕力股肱タル陸海軍人ニ告ク

朕深ク時運ニ稽ヘ千戈ヲ戢メ兵備ヲ撤セムトス皇祖考ノ遺訓ヲ念ヒ汝等軍人多年ノ忠誠ヲ顧レハ切切トシテ胸次ヲ刺ス特ニ戦ニ殫レ病ニ死シタル幾多ノ將兵ニ對シテハ忉忉ニ勝ヘス

茲ニ兵ヲ解クニ方リ一絲不紊レサル統制ノ下整齊迅速ナル復員ヲ實施シ以テ皇軍有終ノ美ヲ濟スハ朕ノ深ク庶幾スル所ナリ

汝等軍人其レ克ク朕力意ヲ體シ忠良ナル臣民トシテ各民業ニ就キ艱苦ニ耐ヘ荊棘ヲ拓キ以テ戦後復興ニ力ヲ致サムコトヲ期セヨ』

この勅語が伝達されたのです。血氣の青年将兵

もこれ以上は暴挙となり、国賊になると静まりました。自分達は八月二十九日、潜水艦長命令により「一時帰休す」ということになりました。

鉄路沿線の悲惨な状態、一面は焼野原となり、瓦礫の山と化し、ただ驚きの目で眺めながら懐かしの故郷へ帰りました。啄木の詩「ふる里の山はなつかしきかな」でした。

一夜、ゆつくりと家族と語り合いました、弟、妹達が「艦の話聞かせ」というので、一言にいえぬが、艦が浮上した時に艦上に出て、一口吸った大氣が一番おいしいことだ。常日頃、何事もなく生きているが「水と空氣」は大自然の恵み、これに感謝せよと語り聞かせました。

九月一日、艦長より電報が来ました。電文には「キトウセヨ・セカ」潜水艦に帰れと潜水艦艦長からの電報です。一夜だけの帰宅でしたが、すぐ帰艦しました。残務整理をせよとのことでしたが、約半数は復帰しませんでした。またわずか一夜の間に、軍需物資が多量に紛失していました。残務

整理として潜水艦隊勤務者の戦時国債及び乗勤手

当の金銭帳簿、航海日誌、機関日誌等の処置や処理について、上級職の指示にて処分しました。また艦内外の主要個所や攻撃用兵器等も総べて隠密裡に処理しました。

同年九月十日頃でした、長崎県大村恵比須湾に回航し、残務整理は解除となりました。国破れても山河あり、外洋の静かな海底に艦は永遠の眠りに就いたのです。決別式は涙の中で「海行かば」を歌い幕を降ろしました。

最後に艦艇損失数（軍艦のみ）を記します。

全損失数 八八〇・戦闘艦艇損失数 三三三

内訳 航空母艦 二一 戦艦 一一

重巡洋艦 一五 軽巡洋艦 二三

駆逐艦 一三五 潜水艦 一二七

戦闘艦艇以外数 五四八

なお潜水艦「伊五二号」とは共に大西洋で「呂五〇一号」が訪独中に消えました。

自分の完全な復員は昭和二十年十一月十五日、

回航残務整理解除後の復員でした。